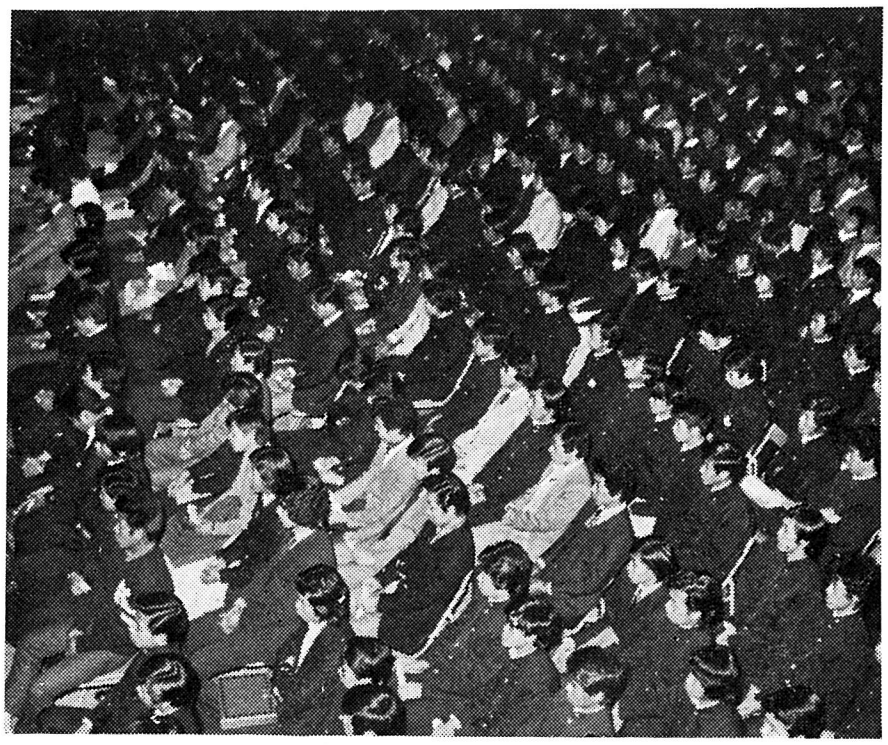
入学式で50年度の幕あき



第九回入学式の風景

三月二十五日の卒業式。四月十日の入学式。去る人と来る人、悲喜こもごもの場面があちらこちらに展開された。両者にとっては新しい人生の門出。実社会と大学では〝住む世界〟の違いはあるが、自己の能力をさらに開拓、錬磨していく出発点だ。ことしからシステム工学科が新設され、創立十周年に向けて本学のますますの発展が望まれる。

第九回入学式　藤岡学長あいさつ

〝ものを考える人に〟

集う八六七名のフレッシュマン

藤岡通夫学長

本日は第九回の入学式を迎えるわけですが、長年の努力の効あって本学へ入学されましておめでとうございます。皆さんのご両親やご家族のかたもさぞかしお喜びのことと存じあげます。

皆さんは本学へ入学されまして大学生として新しい一歩を踏み出すことになるわけですが、この時にあたりわたくしの日頃思うことを少し述べてみたいと思います。

◇　◇

まず最初に、皆さんには失礼な言い方かとも思うのですが、入学して何をしようかと考えたことがあるや否や、ということをお尋ねしたい。なかには、それぞれの信念を抱いて入学された方もいるとは信じますけれども、最近の新聞などにも書かれていることですが〝近ごろの学生は、いったい何のために大学へ入るのか〟といった記事を目にいたします。現実に本学にも、その〝何のために〟という課題を顧りみない学生がいることは誠に遺憾なことであります。

近ごろ、無気力、無関心、無責任の三無主義が流行しているということですが、何をするあてもなく入学し、ただ就職のためのパスポートをとるぐらいにしか考えていない諸君がいるようであります。

このような情ない現象は、ひとつには昭和三十一年以来の経済高度成長のひずみとなって現れているものと思われます。つまり、〝大学を出さえすれば就職口があることだし、会社からはひっぱりだこ……〟ときわめて安易な気持を助長せしめてきたと思われます。

しかし、そういう時代は過ぎ去り、ことしあたりは就職も困難な状況がみうけられます。加えて今後の日本の経済成長は高くは望めないだろうということも注意を要します。従って、今までのような安易な気持で学生生活を送ることは、もはや社会的に通用しなくなるでありましょう。

かような社会的な背景にありますから、諸君にはしっかり勉強して、実力をつけていただきたいものです

◇　◇

ところで、〝大学で勉強をする〟とはどういうことか。

簡単に申しますと、ものを考える人になってほしい、ということであります。皆さんが工業高校で習われたことは―わたくしもその実態を承知いたしておるつもりですが――時間の制約などがありまして、あれもこれもしなくてはならないという前提から、つめこみ主義的な教育であったことが容易に察せられます。当然、すべての学習が暗記もののように解されて教え込まれてきたことでありましょう。わたくしも本学の学生と接触して気づきましたことですけれども、数学の教科ですらも暗記ものと感ちがいしている事実をまのあたりにして、がく然とした思いがございます。

◇　◇

次に、皆さんは工業高校を経て本学で講義を受けられるわけでありますが、皆さんの何人かは恐らくその講義内容について、〝大学といっても高校と同じようなことをやっているじゃないか〟という疑念を持たれるかと思われます。

本学では、工業高校を卒業されてきた皆さんのために、いかに適切な教育を施すかということを熱心に研究し、努力を重ねてきており、さらによりよき教育を産み出すために、目下検討を続けております。しかしながら、いかに良いお膳立をこしらえてみたところでそれを食べる意志、すなわち食欲がなければ、せっかくの努力の結晶は水泡に帰するでありましょう。

先ほどお話ししましたが、学習内容が大学と高校ではさほど変わらないのでは、という問題につきましても、まず、学問は深遠なものであるとの認識のうえにたって追求していただきたいものであります。たとえ、内容的に同じであったにせよ、ものの考え方によってはずいぶん思っていたことと異なるものだ、という結論に必ずや達するでありましょう。

◇　◇

ここで、わたくしの経験を述べてみることにします。

旧制高校時代のことですが、微分学という科目がありまして、最初の授業の時、その先生がいわれるには、「微分学とは何ぞや。それは教科書の始めの方に書いてある通りだが、恐らく諸君には分かるまい。その定義なるものは、微分学を終えかけたころに、やっと諸君もそれをうすうすながら感じとることができよう」ということでした。結果的には、先生のおっしゃったことは実に当を得ておりまして、その表現通りになった次第であります。

その根本に立ち帰り、思考段階を経てその内容を理解していくところに、学問をする楽しさを味わうことでありましょう。

だから、同じものができたからつまらないと思う者は、本人の頭脳にまったく進歩のきざしがないといっても過言ではないでしょう。次に、ものを考えていく場合に、むずかしい問題に出くわすことが多々あるかとも思われます。

最近の風潮として心配いたしますことは、むずかしいことは避けて通ろうとする消極的な姿勢であります。これはまことに顕著な傾向であります。それはぜひとも改めていただきたい。

◇　◇

これもやはり、旧制高校でのわたくしの経験ですが、次のことがわたくしの脳裏にこびりついております。

二つのむずかしい問題がありました。そのひとつは、鉱物学における精晶学であり、もうひとつは積分のカーブトレーシングでありました。「これはすこぶる難解なもので、いつも落伍者が多く、わたくし自身、ほとほと弱りはてているんだよ」先生のこの〝理解できんかもしれないぞ〟という言葉が、わたくしを発奮させる材料となり、〝ひとつやってみよう〟と腹をきめて、他の科目はともあれ、それの勉強だけに必死に取り組みました。

とにもかくにも、この二教科だけは手当たり次第に問題を解き続けました。それが功を奏したのかいざ試験の時にも、一瀉千里のごとくすらすらと問題が解け、他人にさきがけて先生に答案を提出したところ、先生はたいそうお喜びのようすで、わたくしも得意満面の面持ちで教室を後にしたものでした。

ところが、それとはうらはらにやさしいと思われていた問題ができていませんでした。

そこで、わたくしは自分で一つの悟りをひらきました。教科書に載っているものなら、どんな難解なことでも、やろうと思えばできるし、逆に、やさしい問題でもやらなければできない、と確信するに至りました。

◇　◇

このきわめて単純な、わかりきったことでも、自分自身で実践してはじめて、その可能性を自覚したところに大きな意義がありまして日頃薄れゆく学生生活の思い出の中にも、鮮明に記憶している貴重な体験であります。すなわち〝やってみよう〟〝やるぞ〟といった積極果敢な試みと、強い意志をもってすれば、たとえ難解な問題であれ、自づと片がつくものだということでございます。

以上のことを念頭におかれまして、皆さんの人生においてこれからの四年間を有意義な年月にしていただきたいものです。

皆さんが学窓を去られた後に学生生活をふりかえった時、悔いの残らない、輝かしい、意義ある四年間であったと思い起こせるように学業に精励されることを望む次第でございます。

後援会長に根本繁氏

後援会総会開かれる

総会

後援会は五月十八日、昭和50年度総会を開催した。すでに会報で報告している49年度事業報告をはじめ、決算報告、新年度事業計画予算案、役員の改選等すべての議事項目は満場一致で可決された。

役員

本総会で決定した新年度役員は次の通りである。

会長　根本　繁（M・4）
副会長　栗林健五郎（A・4）
〃　西田　勝彦（A・4）
〃　小淵岩太郎（A・3）
総務　橋本　玲子（E・4）
〃　安倍　勲（A・3）
会計　植松　清一（E・3）
監事　春山　高志（E・2）
〃　星　新作（A・2）
〃　加藤　富雄（E・3）
（敬称略）

地域別会員懇談会

50年度の地域別会員懇談会は、昨年が東北、中部方面であったので、本年度は九州、四国、中国地方を予定している。詳細については、実施計画が出来次第、関係地域会員にお知らせする。

名簿・会報

会員名簿と会報は七月上旬に会員諸氏の手元に届くように準備している。学生諸君から提出された資料をもとに校正しているので、住所変更、電話変更等が生じた場合には、直ちに、学生課に届出るように注意されたい。また、会員の声を多く取り上げて会報を作成したいと願っているので、ご意見等を後援会事務局宛て連絡を頂きたい。

地域連絡員

後援会では、各地方に在住される会員と大学との連絡を緊密にするため、次の各氏に連絡員を委嘱しているので連絡員制度を利用していただきたい。後援会では本制度をさらに発展させ、地域支部の開設を試みようとしている。

北海道地区、小野吉太郎氏（小樽☎0134（25）7412）
東北地区、今村豊三郎氏（理事・青森☎0177（43）2611）
細谷昭一氏（理事・山形☎0238（23）4789）
上越地区、伊藤章士雄氏（理事・新潟☎02558（7）2206）
井島久男氏（理事・新潟☎0252（59）3151）
甲信越地区・春山高志氏（理事・長野☎02667（2）3360）
東海地区・植松清一氏（理事・静岡☎05597（8）6258）
大野芳夫氏（理事・愛知☎052（621）0347）
関西地区・西田勝彦氏（理事・大阪☎06（451）5107）・堀美代子氏（理事・兵庫☎07932（2）0278）。

山田先生叙勲

山田国親氏（前日本工業大学教授）は、春の叙勲で勲三等瑞宝章を授与されました。この叙勲は、同氏の気象学畑でのご活躍と、その貢献度が評価されたもの。

【山田氏の略歴】明治三十七年十二月十四日生　大分県（昭和四年）東京帝国大学理学部地震学科卒業後、教員、陸軍気象部、気象技術官養成所、中央気象台予報部を経て、（三十年―三十五年）札幌管区気象台技術部長、（三十五年―四十年）長崎海洋気象台台長（四十二年―四十九）本学の物理学教授、現非常勤講師

出身県別入学者数

北海道一七、青森一七、岩手一八、宮城一六、秋田一七、山形一四、福島三七、茨城三八、栃木三三、群馬一五、埼玉九一、千葉三一、東京一七二、神奈川二〇、新潟二一、富山三、石川一〇、福井一、山梨二三、長野三一、静岡三二、愛知五、岐阜七、三重一、滋賀一、大阪八、兵庫一〇、奈良三、鳥取七、島根三、岡山八、広島九、山口二、徳島一、香川四、愛媛四、高知二、福岡一、佐賀一、長崎一、熊本一、大分五、宮崎二、鹿児島一〇、沖縄五（総数八六七名）

海外研修

高橋簾夫助教授　十月十四日からアメリカのシカゴで開催される「第二十一回電気接点セミナー」に出席し、研究発表を行う予定。

中馬惟朗助教授　ハワイ大学で微分幾何学に関する文献調査と「数学教員の国際会議―ハワイ・ホノルル大会」に出席。

塚林功助手　フランスに渡り、プラズマの研究と装置等を視察。

盆踊り大会

夏の風物詩「盆踊り大会」（体育会主催・実行委員長＝村田順章機四）が七月五日・六日、図書館の裏庭で行われる。櫓の上の太鼓の響きと思い思いの恰好で踊り回るこの大会は、年中行事として定着化する一方、近所の人からも喜ばれ、〝地域社会〟での交流に一役買っている。

藤根　恵子氏（建築学科第一学年、名寄高等学校出身）去る五月二十日午前三時三十分、脳溢血のため杉戸町の東埼玉病院で逝去されました。享年十九歳。

◆　◆　◆

二十一日、通夜。二十二日午前八時から宮代町西原の青林寺において、故人のご両親、ご親族をはじめ、本学からは学長および大学関係者各位と学生の有志諸君が参列して、告別式がしめやかに執り行われました。戒名は藤芳院珠月恵光大姉。

◆　◆　◆

ここに慎しんで故人のご冥福をお祈り申し上げます。

日本工業大学通信

発行所
日本工業大学
広報課
埼玉県南埼玉郡宮代町
郵便番号345
電話04803（2）3251

行事予定

6/29　学園創立記念日
7/11　夏季休暇・図書館閉館
7/12　補講
9/4　講義開始・図書館開館
9/30　前期末試験
10/1　休校
10/6　後期講義開始

昭和五十年度人事異動
教員体制整う
新たに十氏が専任教員に

創立後間もない本学にあって、学生の指導や教学体制の確立など多方面にわたるご活躍と本学の発展に大きく貢献された、機械工学科の小林和雄教授、教養課程の山田国親教授兼図書館長、中谷太郎教授、土井義信教授および佐藤文一教授の五氏は、去る三月三十一日付で勇退された。一方、新任教員として岡本鐇輔教授、三浦靭郎教授、米田桂三教授（以上教養課程）および土井正志智教授（教職課程）のベテラン教授を迎えると共に、若手のホープとして柳下崇助教授をはじめ鈴木康之助教授、熊沢佐夫講師、長谷川嗣彦講師といった新進気鋭のそうそうたる面々と本学二期生の有賀幸則君が機械工学科助手にそれぞれ四月一日付で任用された。加えて、電気工学科教授に桑田正信氏が六月一日付で新任することが決まった。なお、新図書館長には三浦靭郎教授が就任した。

新任教員とその略歴

【教養課程】
岡本 鐇輔教授
大正九年一月十七日生　東京帝国大学法学部卒、前学芸大学助教授、本学教養課程の非常勤講師、著書に「憲法への招待」などがある。担当は経済学と法学、元学生相談室

米田 桂三教授
明治四十二年九月六日生　京都帝国大学理学部卒、元横浜市立大学教授、同大学理学部長、「実践統計学」などの著書がある。主に解析学を担当、15研究室

三浦 靭郎教授
明治四十五年二月五日生　東京帝国大学文学部大学院終了、前学芸大学教授、同大第一部長、著書に「和独辞典」（共著・代表人）がある

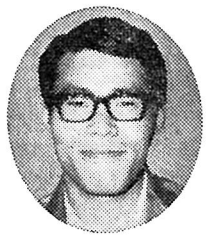
柳下 崇助教授
独語を担当、図書館長を兼任、図書館長室
昭和十七月一月十八日生、日本大学大学院博士課程終了、理学博士、前日本大学および本学非常勤講師、プラズマのジャンルに活躍

鈴木 康之助教授
昭和十八年一月一日生、東京理科大学大学院終了、前東京理科大学理工学部助手、攪拌技術の分野で活躍。化学を担当、49研究室（四号館）

熊沢 佐夫講師
昭和十四年五月二十九日生　早稲田大学大学院終了、前共立女子短大および立正女子短大非常勤講師、担当は英語　22研究室

長谷川嗣彦講師
昭和二十年十月十八日生　早稲田大学大学院終了、前国士館大学および東京理科大学非常勤講師
担当はドイツ語　21研究室

【教職課程】
土井正志智教授
大正七年四月十七日生　大阪帝国大学工学部卒業後、アメリカ・オハイオ州立大学大学院技術教育学研究科終了、前文部省初等中等教育局職業教育課教科調査官（工業教育担当）「工業技術教育法」をはじめ多数の教育関連著書がある。教職課程に所属し教育原理と工業科教育法を担当　教職研究室



【機械工学科】
有賀 幸則助手
昭和二十四年七月二十五日生　本学機械工学科卒業（第二期生）後、工学院大学大学院修士課程を終了　1研究室

【電気工学科】
桑田 正信教授
大正四年九月二十三日生　東京工業大学電気工学科卒　工学博士前日立製作所副技士長・信頼性工学の権威者
担当は電子通信工学部門の予定。

◎専任教員

昇格

【教養課程】
矢島幸雄教授（一月一日付）
【機械工学科】
鈴木 昭助教授（四月一日付）
【電気工学科】
高橋篤夫助教授（四月一日付）

退職

（昭和五十年三月三十一日付）
【教養課程】
中谷太郎教授（数学）
山田国親教授（物理学）
佐藤文一教授（英語）
土井義信教授（独語）
【機械工学科】
小林和雄教授
大村幸男助手

◎非常勤教員

（四月一日付委嘱）
【教養課程】
井ケ田 猛（いげた・たけし）氏　千葉県立保育専門学院講師　八千代市公害対策審委員　公害論
勝又 浩（かつまた・ひろし）氏　文学
梅本信介（うめもと・しんすけ）氏　哲学
国枝涿治（くにえだ・たくじ）氏　埼玉大学教育学部非常勤講師　数学
薮 康彦（やぶ・やすひこ）氏　東放学園非常勤講師　数学
清水 進（しみず・すすむ）氏　職業訓練大学校非常勤講師数学
豊成敏隆（とよなり・としたか）氏　都立千歳高等学校教諭　数学
山田国親（やまだ・くにちか）氏　前本学教授　物理学、同演習
土田美広（つちだ・よしひろ）氏　東京理科大学時間講師物理実験
関 一（せき・はじめ）氏　東京理科大学大学授業嘱託講師、物理学、同実験
新島通弘（にいじま・みちひろ）氏　早稲田大学教授　英語
永井豊実（ながい・とよみ）氏　東洋短期大学講師　英語
山野友三郎（やまの・ともさぶろう）氏　作新学院女子短期大学助教授　保健体育、実技
【機械工学科】
小林和雄（こばやし・かずお）氏　前本学教授　卒業計画指導
退職（昭和五十年三月三十一日付）
【教養課程】
前田 功雄氏（数学）
初見 昇氏（独語）
【電気工学科】
高橋幸人氏
青野武雄氏

広い視野をもつ技術家に
第五回卒業式　藤岡学長のあいさつ

本日、めでたく卒業式を迎えられましておめでとうございます。皆さんは、これから社会人として新しい人生に踏み出すことになりますが、皆さんを迎える社会は、今日、必ずしも曖かいものではなく、厳しいものであるかと思います。

一昨年、わたくしはこの席で述べたことがありますが、「最近の日本の経済は異状なものがあり、現状は長続きしないだろう」ということです。その後間もなく、オイル・ショックが起こり、世界の経済情勢が大きく変動してきており、日本でもその影響でインフレが悪性化し、そのため総需要抑制策や金融引締めなどの対策がとられ、急激に不況の波が押し寄せてきました。当然のことながら、"就職戦線"にも大きな影響をきたしております。

この不況に関連して、おもしろい一文があります。

「十年前なら、まだ大学を出たことは仕事を得る手段になったであろう。だが、そんな時期はとっくに過ぎてしまった。いまは、職を求める学士が、むれをなして街にあふれている」

これは、いまのことを書いたのではありません。昭和八年当時の学生を描いた、田宮虎彦の「菊坂」の一節です。

現在の不況は、当時の不況とは比較にならず、そこまではいっていないし、今後もならないだろうと思います。しかし、アメリカの不況は想像以上のようで、失業者も増加の一途をたどっているとのことです。最近の経済の動きを見てみますと、一国だけの経済でなく、世界的な視野で考えなければならなくなっているようですから、将来の日本の経済も決して楽観できるものではありません。

さて、このような時勢にあたりまして、皆さんは一体何を頼りにしたらよいのか、が問題です。この場合、何より頼りになるものは、やはり自分の実力です。特に、技術家は実力さえあれば、どんな世の中でも"たより"はないものです。ぜひ、自分の職場でそれぞれの技術を磨いていただきたい。これは、日本人全体の傾向でもありますが特に、技術家はとかく狭量で、視野が狭い。広い視野をもつ技術家に成長していただきたい。

最近、巨視的・微視的という言葉がよく用いられます。すなわち、ものを大きく見るか狭く見るかということですが、これについてわたくしの所懐を少しく述べさせていただきます。

その一例は、最近、非常なブームを呼んで話題になっております甚氏の著書に関する「日本古代学」があります。これには法隆寺のことを書いた"隠された十字架"、それに"高松塚""柿本人麻呂論"などが載っています。

わたくしはこれを読み終えた後、近来にない感動と興趣を覚え、さっそくわたくしの友人や弟子に話しましたところ意外なことに、そっけない反応で、推理小説まがいの書ではないかと言った者もありました。しかしその実は、読ますしての"批判"でした。

確かに、部分的にはいろいろ推理を書きすぎたきらいもあって、いささか反論する箇所があるにはありますが、何よりもわたくしをして感銘せしめたことはこの書の全体の構成であって広い視野から、あらゆる角度から、細かく検討して書かれていることです。すなわち、いままでのそれぞれの専門の学者が考えもしなかった角度から、ものを見ていることが注目されるのであって、このようなものの考え方はすべての事に役立つ、とわたくしは考えたのでした。

ところが、日本の学者は、こと専門に関する限り、"自分の言うことは絶対に正しい"と思い込んでいるようで、自分の専門分野以外の人からとやかくいわれることを極端に嫌う傾向があります。最近のように学問の細分化・専門化が進むにつれてかれらは自分の"カラ"に閉じこもり、門外漢のいうことには耳を傾けようとしない傾向が、より一層顕著になってきているようです。

もうひとつの例は、昭和四十七年は国内で航空事故が続発した年でありました。羽田沖での全日空の墜落、羽田空港でのアメリカ機の着陸失敗、富士山頂でのイギリス機の解体墜落、松山沖での全日空の墜落など、大きな事故が一年に四回も起こりました。当然、専門家による調査団が編成されて、事故の原因を究明するため長期にわたる調査が行われましたが、結論が出ないままその調査団は解散しました。

ところが、イギリスでも、一九五一年、BOACのコメット機がローマからロンドンに向かう最高度に達した上空で事故を起こし、地中海へ墜落するという事故が、相ついで二度も起こりました。そこで、イギリス当局は徹底的な調査に乗り出し、まず海をさらって機体の破片を拾い、機体を復元するとともにすくい上げた遺体を解剖に付して、直接の死因を追求することになりました。調査の結果、死因は急激な減圧によるもので、それは飛行機の墜落が爆破によって起こり、それとともに急激な減圧を生じたと断じました。

爆破の原因は機体の金属の疲労からと推定し、同じ機体を水槽につけ、水圧をかけたりやめたりの繰り返しを二千五百回も続けたところ、金属の疲労により機体に亀裂を生じることが実証され、原因の解明に達したのであります。

ここで注目することは、事故の原因を究明するために遺体を解剖したことです。感情に走る国民性をもつ日本人は、はたしてかようなことができましょうか。おそらくそれは許されないでしょう。では、ヨーロッパ人は遺体に対する敬けんさがないかというと、必ずしもそうは思われません。

例えばヨーロッパでは道路上で殉列に出合った時見知らぬ人でも脱帽して弔意を表する敬けんさを持っております。そこで事故が起こった時に考えなければならないことは、何が最も重要なことかということです。事故の原因を究明して再び悲惨を繰り返さないようにすることが遺体を大切にすることかで、なかなか難しい問題です。

ただ、ここに わたくしが申したいことは、総合的に何を考えるべきかということで、今後皆さんもいろいろの課題にぶつかることが多いことでしょうがぜひ広い視野でものを見、考え行動していただきたいとお願いする次第です。皆さんのご発展をお祈りします。

就職事務開始は九月一日から

オイル・ショックに端を発した経済不況は、労働市場における雇用関係に大きな波紋を投げかけた。

一部の企業には、採用内定取消し、採用時期の延期等の非常手段に訴える会社が現れて、重大な社会不安を巻き起こした。

中央雇用対策協議会では、このような事態を重く見て、求人秩序の混乱を回避し、求人求職活動の円滑を期するため、五月七日付で「昭和五十年度の大学及び高等専門学校卒業予定者の選考開始時期等に関する決議」を取り決め、関係当事者に対して周知徹底を講じた。

それによると、選考開始時期については、"選考（採用の内定にわたる行為を含む。）は、卒業前年の十一月一日 以降 とする。"求人のためにする一切の行為は同じく九月一日以降とする"ことを要請している。

一方、採用内定取消し等を行った企業に対しては、求人活動についての充分な自粛を促し、各業種別の団体には、これらの実効を期するための措置について、相互間の申し合わせをすすめている。

また、労働省は、これらについての指導を徹底するとともに、この決議に違反した企業及び業界に対しては、労働行政関係の各種行政措置により厳しくチェックすることになっている。

本学では、中央雇用対策協議会の決議にもとずき、原則として九月一日以降を目途に求職活動を行う、ことが各学科就職担当者によって決定された。

なお、現在、求人会社の受付は各学科とも行っているが、卒業予定者に対する直接的なあっせんは行っていない。

就職概況

最近、労働省がまとめた五十年度の雇用見通しによると、「五十年度前半は求人、雇用の停滞基調が続き、回復を始めるのは年度後半から」と予測。それも、「急激な好転は望めず、年度間の雇用の伸びも低い見通し」と、いわれている。

教務課調べによると、本学での四十九年度の就職状況は、求人件数で前年比一〇％増の二、四〇四社、求人総人数で同三七％増の七四六五人と数字では前年度をやや上回っている。後半になってからの再募集が増加の一因になっている。また、産業別に就職状況をみてみると、一般機械器具・電気機械器具等の製造部門への就職が四七％でトップ、他は建設業三三％公務（教育含む）八％、商事六％その他六％の順になっている。公務に就く卒業者が多かったことはやはり不況のせいか。

一方、内定取消しを行った会社が四社、自宅待機四社（うち入職延期二社）、初任給凍結一社があった。

求職者にとっては、いまなお厳しい経済情勢のなかで、冷静沈着な態度で企業選択に臨むことはむろんのこと、この難関を突破するためにも、希望する会社の要覧や資料あるいは新聞などに目を通し自分で会社を開拓する、積極的な姿勢で就職に取り組むことが望ましい。